太陽と月の者

イッシャク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
太陽と月の者

【Ｎコード】
Ｎ５３３７Ｔ

【作者名】
イッシャク

【あらすじ】
二匹の大神によって平和になったナカツクニ。だが、突然現れた黒い渦によってチビテラスが吸い込まれてしまった。そして彼がたどり着いたところは・・・・ぬらりひょんの孫の世界だった。

突然の異世界へ

ここは、たくさんのご神木によって災厄から守られている村【神木村】

この村の鳥居の奥には大きな神木がある。木精　サクヤの神木である。その木の根元には大きい白い犬と小さい白い犬が遊んでいた。

大きい犬の名は『アマテラス大神』神木祭の時、大王蛇ヤマタノオロチを倒した英雄である。そしてアマテラスより小さい犬は、彼の子供『チビテラス』である。２匹はかけっこなどをして遊んでいた。

???「こんなにも平和だと神さまも遊んじまうのかい。」

２匹が声のした方を振り向くと緑色に光りながら飛び跳ねている妖精がいた。妖精の名は『イッスン』前にアマテラスと一緒に旅をしたことがあり、天道太子という役目を持つ者である。

イッスン「久しぶりに顔を見に来てみれば楽しそうに遊んでいるなぁ。」

そう言ってイッスンは、アマテラスの頭に飛び乗った。

イッスン「アマ公もチビ公もあんまり平和ボケしてるといざという時に大変なことになっちまうぜぇ。」

そうイッスンが言うが、アマテラス達は話を聞かずに、うたうたと眠ってしまった。

イッスン「・・・っておい！！、人の話は最後まで聞っ・・・ってなんじゃありゃ！？」

イッスンの叫び声に２匹も気がついた。突然空に黒い渦が現れたの

だ。そしてその中から強力な妖気が黒い手になって出てきた。

イッスン　「おいおい、なんだよぉあの邪気に満ちた手は！？」
全員が驚いている中、黒い手が素早い動きでチビテラスを捕まえて、そのまま渦の中に引きずりこんでしまった。アマテラスが急いで渦に入ろうとしたが消えてしまった。

イッスン　「・・・何ということだぃ。チビ公が・・・渦の中に飲み込まれちまった。」

アマテラス「ワッオ～～～～～ン」
アマテラスの悲しい鳴き声が神木村に響いた。

魑魅魍魎の主と日の神子

関東平野のとある街、浮世絵町にある「極道一家」の総大将ぬらりひょんの孫　奴良リクオ。

彼は妖気が混じった雲が空を、闇に変えようとしてるのを桜の木の下で見つめていた。強い邪気に満ちている夏風が桜を揺らした。その姿に気がついた雪女――氷麗は微笑みながらリクオに近寄った。

雪女「若、こちらにいらっしゃったんですね。」

リクオ「うん。つらら、この風・・・少し嫌な風だと思わない・・・・・？」

雪女「私にはよく分かりませんが・・・リクオ様がそう言うのでしたら・・・」

氷麗は風に自分の身に感じさせた。風が氷麗の髪を撫でていって遠くへ去って行った。リクオはそんな氷麗の姿を見て、表情を引き締めた。

リクオ「勘ってやつかな・・・だけど、多分気のせいだと思うけどね！」

いつものように優しく笑うリクオ。氷麗はその笑顔に「はい！」、と笑顔で返した時突如、池の方から大きな音がした。

リクオ「・・・何だ！？」

雪女「池の方からしましたよ。」

リクオ「行ってみよう！」
リクオと雪女が池の方に行ってみると1匹の犬が溺れていた。リクオは急いで池に入り、溺れていた犬を助け出した。犬は震えていて、あまり動かなかった。

雪女「ど、どうしましょ若！？　犬が、犬がーーー！！」

リクオ「とりあえず、居間に連れて温めよう！」

その後、他の妖怪たちにも頼んで、犬をタオルで体を拭いてストーブで温めているとリクオが犬の体のある赤色の模様に気がついた。

「この犬・・・どこから来たんだろう？」

首無「リクオ様。近所にいる犬かもしれませんね。」

雪女「けど、不思議なシマシマ模様がありますね。」
それぞれが色々なことを言っていると犬が眼を開け、気がついた。
キョロキョロとあたりを見渡した。

リクオ「あ、よかった～。気がついたんだね。」
リクオが犬の体調を安心している中で犬は突然吠え始めた始めた。

？？？「ワン、ワン（ありがとう！）」
どこからした声にリクオ達は辺りを見回したが姿や気配も感じがしなく、また先の声がしてその方を向くと犬が吠え始めた。

？？？「ウゥ～～～（さっきからここだと言ってるんじゃないか。）」

リクオ「もしかしてさっきの声は君なの？」
おそるおそるリクオが犬に向かって質問した。雪女や青田坊、カラス天狗などが注目していた。

？？？「ワン、ワン、ワン。（そうだよ。僕の名前はチビテラス。さっきは助けてくれてありがとう。だけど・・・妖怪に助けられるなんてね。）」
犬から声が聞こえるのでリクオをはじめ、その場にいた妖怪に全てが目を丸くしていた。

チビテラス「ワン、ワン。（妖怪にもいい奴がいたなんて知らなかったよ。）

リクオ「ねぇチビテラス。君はどこから来たの？」
チビテラスはこれまで起きた事をリクオに話した。自分のいた世界と謎の黒い手によって、この世界に来てしまったことも・・・・・

チビテラス「クゥゥン～～～（急で悪いけど・・・僕をここに居させてくれない？勝手だと思うけど今は君たちに頼るしかないんだ。迷惑はかけないから、お願い！！）」

チビテラスは頭を下げてお願いした。ダメだと思っていたけど・・・

リクオ「いいよ。たとえみんながダメと言ってもボクは構わないよ。」

雪女「そうですよ。こんなかわいい子犬を野放しにはできません！」
他の妖怪も氷麗の意見に賛成した。その後、カラス天狗が犬小屋が必要ですな、と言いだしみんなで用意することになった。

チビテラス「ワン、ワン。（ありがとう。）」
リクオとチビテラスのやり取りを陰から見ているものがいた。ぬらりひょんと木魚達磨である。

ぬらりひょん「大神の気配がしたと思ったら・・・リクオの奴、やりよるわい。」

木魚達磨「さすが、総大将の孫ですな。」

これが・・・リクオと大神がともに闇に立ち向かう幕の始まりだったのです。

魍魎魍魎の主と日の神子（後書き）

がんばって更新します。

闇の集会（前書き）

遅れてしまってスミマセン！他のものに時間がかかってしまって・・・・・・・どうぞ読んでください。

闇の集会

リクオとチビテラスが仲良くなった数分後・・・

異次元の空間である集会がおこなわれていた。

参加者

ヤマタノオロチ
女郎蜘蛛
赤カブト
エキビョウ
キュウビ
コタネチク
モシレチク
常闇ノ皇
大蟇怪
大ナマズ
千両
万両
怨霊王
鬼ヒトデ
悪路王
鵺（安倍晴明）
山ン本五郎左衛門

悪路王と山ン本五郎左衛門、常闇ノ皇、鵺の誘いで闇の妖怪たちが集まって来たのだ。彼らは地獄でさまよっていたが鵺の反魂の術で復活したのだ。目的は大神とぬらりひょんの世界を自分たちの物に

するためだ。そしてチビテラスを別の世界に送ったのも彼らの仕業だった。

悪路王「よく集まってきてくれた。感謝するぞ」

妖怪たちは円上に座っていて、中心にいる悪路王を見つめた。本当は集まる気がなかったが４人が自分らを復活してくれたから面倒ながら参加した。

山ン本五郎左衛門「みんなに集まってもらったのは、我々に協力してほしいからだ」

エキビョウ「我はそなたらに恩がある。協力をしよう」

コタネチク・モシレチク「「私たちも協力するぞ」」

大ナマズ・千両・万両・鬼ヒトデたちも悪路王たちに協力することを賛成した。

ヤマタノオロチ「俺は嫌だ。貴様らについく気もないし、復活させたのも貴様らじゃ何もできないからだろう」

女郎蜘蛛「主の言う通りだ！」

赤カブト「そもそもお前らのその態度が気にいらないんだよ」

欲望感の強いオロチたちは協力することに反対した。すると他の妖怪たちも悩みだした。そんな中、今まで黙っていたキュウビがしゃべりだした。

キュウビ「私は犬畜生には怨みがある。お前たちもあいつに怨みがあるはずだ・・・とりあえず犬畜生を殺す、ということで協力したらどうだ？」

怨霊王「うむ、いい考えだ。それなら協力してくれるかな？」

全員がオロチの方を見て沈黙した。数分が経つと・・・・・

ヤマタノオロチ「分かった。それなら協力してやろう」

オロチが賛成すると残りの2人も賛成した。これによりすべての妖怪が悪路王達に協力することになった。恩を感じる者・自分たちの欲望を満たそうとする者・復讐を果たそうとする者、それぞれの想いは違っていた。

大蟇怪「それじゃ、まずはワテから行こう。日の神子め。必ず殺してきてやるやい！」

そう言うと辺り一面黒い瘴気がでて彼らを包むようにして消えていった。

闇の集会（後書き）

悪路王「なんだかんだでみんな協力してくれたな」

鵺「これからはこんなふうにミニコントをするからよろしく頼む！」

オロチ「次回太陽と月の者『大蟇怪との死闘』絶対に見ろよ」

全員「「「「「あっ！！ずるい！！！！」」」」」

大蟇怪との死闘（前書き）

作者「またも遅くなってすみません！」
夜リクオ「お前・・・やる気あるのか！」

そう言って刀をゆっくり抜くリクオ。

チビテラス「ワンワン（僕が介錯を・・・）」
作者「許して～～～～」

大蟇怪との死闘

チビテラスが奴良組に来て一週間が経った。基本はおとなしいので本家の妖怪たちにもかわいがれていた。リクオたちに用意された犬小屋に暮らしていて、少しずつだがこの世界に慣れていた。夕方になるとリクオに散歩に行かせてもらっている。今は川の近くを歩いていた。

（これからはチビテラス＝テラになります。）

リクオ「いい風だね。テラ」

テラ「ワン！（そうだねリクオ♪）」

雪女「若に一番懐かれていますね」

3人（？）が色々話をしていた時、川から強い妖気を感じた。全員が向いていると川から赤い舌が飛び出した。

雪女「若、危ない！！」

雪女がリクオを庇い、テラもジャンプしてかわした。

大蟇怪「ゲロゲロ、さすがは日の神子。よくかわしたなぁ」

リクオ「お前は一体？」

大蟇怪「ワシは大蟇怪や。そこの犬っころに用があるんや。邪魔をするなや！」

大蟇怪は頬を大きくしてテラを潰そうとした。だが、テラはすばやくかわして筆業・一閃で攻撃した。とっさの攻撃に驚いたが大蟇怪にはあまり効いてなかった。

大蟇怪「ゲロゲロゲロ♪相棒がいないお前なんかただの雑魚や！」

夜リクオ「相棒ねぇ、それならここにいるぜ」

日が隠れて夜になり、リクオは妖怪に覚醒して雪女も戦闘態勢になっていた。

テラ「くぅ～～ん？（リクオなの？）」

夜リクオ「説明は後だ。いくぞ！」

リクオは刀を抜いて大蟇怪に疾風のごとく近づいた。そのまま切り裂こうとしたが大蟇怪は自慢の歌声でリクオの動きを止め、頬を大きくして潰そうとしたが・・・

雪女「呪いの吹雪・雪化粧」

ピキピキッ

雪女の技で頬を凍らせられて怯んだすきにリクオとテラが同時に頬を破壊した。

大蟇怪「ガッ、おのれ～～よくも・・・許さんで！」

大蟇怪は全力で舌を回し、何度もリクオたちに飛ばした。その衝撃

により雪女の着物が破けて・・・躯体的に上半身裸になった。

テラ「アン？（あっ・・・）」

夜リクオ「あっ・・・」

大蟇怪「こりゃい～や～～～（ニヤニヤ」

雪女「キャァァァァァ」

浮世絵町中に響くくらいの叫び声だった。雪女は茂みの中に隠れて大蟇怪が見ているすきにリクオが横から刀を振り落とした。

夜リクオ「てめぇ、オレの下僕に手出してるんじゃね・・・」

ドッシュゥゥゥ

切られた所から大量に血が出て激しい痛みに耐えきれず、大蟇怪は高～くジャンプした。その瞬間テラが筆業・桜花を使い、へその部分の甲羅を開けた。そしてリクオにそこを切れと教えた。

夜リクオ「覚悟しな。変態野郎・・・」

大蟇怪「や、やめろ～～～！！」

大きく振りあがった刀は迷いなく大蟇怪を真っ二つにした。大蟇怪の死体は川に落ちて消えた。すると川が前よりきれいに感じた。リクオは刀を納め雪女に近づいた。

夜リクオ「大丈夫か？つらら。これを着な」

雪女「ありがとうございます。（若の羽織・・・とても温かい）」

恥ずかしかったが最後は幸せな気分になった雪女であった。

大蟇怪との死闘（後書き）

作者「いや～～なかなかのエロ話だね。」
雪女「さ～く～しゃ～さ～ん！！！」
作者「あっ、いや、その・・・次でもよろしくね。」
夜リクオ「・・・やっぱり切る！！！」

スパっ

作者「ギャァァァ・・・・」
テラ「ワン！（次回太陽と月の者『妖怪歌舞伎』よろしく！）」

妖怪歌舞伎（前書き）

作者「さあさあ、今回もおもしろく書いていこう」
テラ「アン？（何であんなにも張り切ってるの）」
リクオ「いいことでもあったんじゃないかな」
作者「ほらほら、油売ってないで始めるよ！！」

妖怪歌舞伎

金曜日の学校の放課後

リクオはいつも通り雑用を終わらせて清継十字怪奇探偵団の会議に参加していた。ちなみに雪女は夕食当番なので早く帰っていた。リクオに「早く帰ってきてくださいね」と伝言を残したのは言うまでもない。

清継「みんなよく集まったね。今回の内容は知っての通りの旧校舎の噂だ」

旧校舎の噂＝最近になって学生が行方不明になっているのだ。しかも1人や2人ではなく、多くの学生が行方不明になって、それから旧校舎の中で怪しい光が現れるようになった。調べに行った人たちも同じようになった。清継はそれを調べる気でいた。

リクオ「ダメだよ！それ本当に危ないかもしれないよ」

清継「それならなおさら調べなくてはいかん！今度こそ会えるかも！」

こうしてリクオ達（巻と鳥居は用事でいない）は清継の（強引な）決めたことに土曜の夕方に行くことになった。夕方になってリクオ達は旧校舎の中を調べた。もともとここは若い妖怪が住み着いている所だが、不思議なことに1匹もいない。だが、体育館の方に向かうと突然強い妖気を感じた。

リクオ「（何だ、この妖気は・・・今まで感じたことのない気だ）」

ゆら「リクオ君、今の妖気感じた？」

同じメンバーの花開院ゆらが小声でリクオに話しかけた。彼女は陰陽師で普通の人間とは違うので妖気を感じ取れるのだ。

リクオ「うん。やっぱり今回も妖怪がからんでいたね」

リクオとゆらがみんなに聞こえないように話している中、清継が体育館の扉を開けた。

バタンッ

リクオ「え！？ちょ、どうしたのみんな！」

ゆら「ダメや。魂を抜きとられとる」

清継たちが倒れて確認している時、舞台の方から物音がした。振り向くとそこに大きなカラクリ人形があった。派手な着物と羽織を着て、大きな手、赤く長い髪、獅子舞のような顔のした人形である。

？「フフフ・・・またもノコノコ現れたわ。万両」

？「そうだな千両。愚かな奴だ」

パン！　パン！

舞台から突然紙吹雪が吹きだし、２匹の妖怪が現れた。姿はまるで・・・鶴と亀が歌舞伎役者になったような姿であった。

ゆら「お前ら何や、何が目的や！」

千両「我らの目的かい？それはね、日の神子を消すことだよ」

万両「さすればあの世界は我らの物だ！」

２人はテラを倒すために人間の魂を食らい、力をつけようと自分たちの踊りで集めていたのだ。

リクオ「（大蟇怪の仲間か・・・）お前たちはそのためどれだけの人を・・・・・」

リクオは怒りで自分でも気付かづに妖怪化していた。千両と万両はリクオの畏れに震えた。

千両「（何だこいつ！？）ふ、ふん。お前たちもこの『赤獅子』でやっつけてやるよ！」

そう言うと２匹は黒い瘴気になり、カラクリの中に入っていった。すると赤獅子の目が赤く光ると動き出した。

ゆら「そういうことなら。あなたたちをここで滅します！」

夜リクオ「人に仇なす奴は俺が許さね！！」

互いの準備が整い戦いが始まった。

妖怪歌舞伎（後書き）

テラ「キュン～（作者さん僕の出番がない）」
作者「ごめんね～～次は出してあげるから♪」
夜リクオ「次回太陽と月の者『陰陽師と日の神子』よろしく」

陰陽師と日の神子（前書き）

作者「しばらく書けません。理由は簡単・・・・・テストだ！！！」
テラ「クゥ～ン（ごめんね）」
リクオ「すみません！」

陰陽師と日の神子

夜の旧校舎でリクオとゆらは赤獅子と闘っていた。二人は協力して何度も攻撃をしているが、赤獅子に今まで取られていた魂が紫色の濃い光になって赤獅子を回復させていた。それによりリクオたちは苦戦をしていた。

赤獅子「オ・マ・エ・ラ・ヨ・ワ・イ」

夜リクオ「チッ・・・」

ゆら「あかん。このままじゃ・・・」

テラがいれば・・・戦いながらリクオはそう思い始めた。赤獅子はテラと戦い倒された妖怪だ。テラなら弱点を知っている。何とかしてこのことをテラに知らせないと・・・・

本家

テラ「クゥン（遅いなリクオ。僕も行きたかったな～）」

リクオが用事があることで散歩に行けず、テラはつまらない時間を

過ごしていた。そこへ三羽鴉の黒羽丸が突然、話しかけてきた。あまり話したことのない妖怪だがリクオの下僕であることを教えられていたのですぐに尻尾を振り始めた。

黒羽丸「今からパトロールに行くが、一緒についていくか？」

テラ「ワン、ワン！（行く行く！）」

暇な時間を過ごすよりこっちの方がいいと判断したのか、首を縦に振って黒羽丸の肩に乗った。しばらくは空を飛ぶことに楽しんでいたが、ある方向からの２つの妖気に気付いた。１つはリクオともう１つは・・・・・これは！？

テラ「ワン！ワン！（向こうに行って！）」

黒羽丸「な、なんだ！？向こうに行きたいのか？」

黒羽丸はテラが吠えた先に飛んで行った。飛んで行くうちに黒羽丸も強い妖気に気付きだした。ついたところは旧校舎で中ではリクオが戦っている姿が見えた。テラは黒羽丸につかまり、窓から侵入した。リクオは黒羽丸がテラを連れてきていたことに心の中で感謝した。

夜リクオ「テラ、すまねぇがあいつを倒すのに手を貸せ！」

赤獅子「日・ノ・神・子・憎・イ・奴・殺・ス」

赤獅子はテラに気付くと巨大な手で潰そうとした。だがその直前に筆業・爆玉で攻撃した。そのショックで赤獅子は気絶（？）した。そこへ魂が回復させようとした。

ゆら「くっ、また同じことを！」

悔しがるゆらを見たときにテラは筆業で持っていた札を操り、魂の回復を封じた。それにより千両と万両が赤獅子から抜け出した。その瞬間をリクオ達は見逃さなかった。

ゆら「廉貞！式神改造人式一体、黄泉送葬水包銃！！」

ゆらの技で千両は滅せられ、リクオの一閃で万両も切り倒された。赤獅子もバラバラになって魂は元の体の主に戻っていった。ちなみに清継たちはその日のことは覚えていなかったらしい。

陰陽師と日の神子（後書き）

作者「そろそろテストなのでしばらく更新しませんので、ご注意を！！」

双魔神の脅威（前書き）

作者「どうも～～。久しぶりの更新です」
夜リクオ「ごくろうだったな」
テラ「ワン！（お疲れ。）」
作者「ありがとう♪あっ、そうだ！今回君たち出番ないから」
夜リクオ・テラ「「え！？」」

双魔神の脅威

大神の世界

テラがいなくなったその日からアマテラスは、ナカツクニ中を探し続けた。村の人や街の人、漁師、動物にもテラについて聞いていた。だが、誰もテラの行方を知らなかった。神木村にたどりつくと木精サクヤがアマテラスたちの目の前に現れた。

サクヤ「アマテラス様。あなたは今日まで休みもなしにテラ様を探し続けています。このままではあなた様の体が持ちません。なにとぞ少し休んでください」

イッスン「サクヤ姉ちゃんの言う通りだぜ。アマ公、少し休もうぜ」

そう言ってイッスンはアマテラスの頭から飛び降りようとした。しかし、アマテラスは休もうとはせず、再び走り出した。

イッスン「お、おい！ちょっと待てよアマ公。止まってくれ～～～！！」

サクヤ「アマテラス様。・・・よほどテラ様が大切なんですね」

サクヤはアマテラスの優しさを思いこんでいたが、その時、突然邪悪な妖気を感じた。感じた先は・・・北の方であった。

アマテラス「クゥン（どこにいるの・・・テラ。）」

疲れにより走るのはやめて歩いている内にアマテラスの目からはいつの間にか涙が落ちていた。自分の子を守れなかった悔しさと子に対する愛情の涙であった。イッスンはそんなアマテラスに気を使い、何も言わずにいた。

ドスッ

突然飛んできた氷柱がアマテラスに突き刺さろうとした。しかし、アマテラスは間一髪のところでそれをよけた。飛んできた方向を見るとそこにはかつてアマテラスがカムイで倒した双魔神・モシレチクとコタネチクであった。

イッスン「な、なんで双魔神がここにいるんだ!?あいつらは倒したはずだ」

イッスンが驚いていると双魔神はお互いに杖を振り上げ、再び氷柱を飛ばしてきた。いつもならよけられるーーーだが、今回は違った。テラを探し続けていたので疲労がたまり、すぐには動けなかった。

イッスン「アマ公!!」

相棒であるイッスンの声が自分の耳の中に響く。
ここまでか・・・ごめん。テラ・・・・・

パッキィィィィン

？「大丈夫か？アマテラス」

アマテラスがゆっくり目を開けるとそこには宝剣「クトネシリカ」を持ち、かつてカムイの双魔神復活による危機の時にアマテラスと共闘して戦った戦士・オキクルミであった。

双魔神の脅威（後書き）

作者「まさかの大神の世界です。オキクルミも出て、盛り上がりますね。次は双魔神戦です。お楽しみに」
オキクルミ「ちなみに気付いていると思うが、アマテラスは雌だからな。次回太陽と月の者『突入！異次元へ』見ておけ」

突入！異次元へ（前書き）

作者「さあさあ、カムイ戦再び始まります！」
オキクルミ「双魔神・・・俺の手で必ず殺す！！」
アマテラス「アッオオ～ン（作者さん。テラに・・・会わせて！！
（グスッ」
作者「分かった！分かった！頑張って書くからまってててくれ」

突入！異次元へ

オキクルミ「久しぶりだな。アマテラス、イッスン」

イッスン「オ、オキクルミ！？何でお前がここにいるんだよ」

復活した双魔神の攻撃と突然のオキクルミの登場で頭の中が混乱していたアマテラスたちだったが、双魔神から逃れてしばらくすると落ち着き、此処に来た理由を聞いた。

オキクルミ「実はカムイで封じてあった双魔神共の像が突然消えてな、サマイクルに言われて原因を探っていたらお前たちに会ったというわけだ」

イッスン「それじゃ、またあいつらが甦ったということならアマ公、オキクルミ。またあいつらを倒そうぜ！」

イッスンがそう言ったのと同時にアマテラスたちを見つけたモシレチクがドリルのように突っ込んできて、コタネチクが帽子をとってそこから紫色の妖気の塊を出した。その瞬間オキクルミは獣の姿になった。

オキクルミ「アマテラス、行くぞ！！」

アマテラス「ワン！（了解した。）」

二匹は互いに遠吠えをして双魔神に向かっていき、モシレチクの攻撃をかわしてアマテラスが筆業・一閃で妖気の塊をはね返し、それによってコタネチクが動きを止めたところを見逃さないでオキクル

ミが矢の状態になって飛んでいき、コタネチクを剣で切りだした。
そのすきにアマテラスがモシレチクに向かって神器・天叢雲剣（あめのむらくものつるぎ）で攻撃した。

ドスンッ

しばらくするとオキクルミの攻撃に耐えきれなくなったコタネチクが地上に落ちた。それを見たモシレチクがアマテラスの攻撃がとどかないところに逃れ、剣を上げて氷柱を飛ばした。

オキクルミ「！？チッ」

イッスン「オキクルミ！！」

ブスッ

氷柱がオキクルミに当たったとモシレチクが思った瞬間に自分の翼が痛みだしたことに気がついた。左右を見るとそこに氷柱が刺さっていた。

モシレチク「ギャァァァァァァァ！！」

痛みで悲鳴を上げた後、狙っていたオキクルミを見ると遠くにいたはずのアマテラスがいた。
実は先程アマテラスは筆業・霧隠を使って時間を遅らせて氷柱を筆業・一閃ではじき返したのだ。

イッスン「今だぜ、オキクルミ。決めやがれ！」

オキクルミ「ウオォォォ～！！」

遠吠えとともに宝剣クネトリシカが青色に光りだしてモシレチクを切り裂いた。

ジリジリ～～～！！

凄まじい音と電流が流れながらモシレチクはカムイの時と同じように花に変わった。それを見ていたコタネチクは慌てながら黒い渦を出して、その中に逃げて行った。アマテラスもテラをさらった渦に飛び込もうとした時、目の前にサクヤが現れた。

サクヤ「アマテラス様。この渦に入る前にどうかこれを受け取ってください」

そう言うとサクヤは何かが入っている少し大きめな袋をアマテラスに渡した。

サクヤ「その袋の中身は必ず役に立つ物です。それでは・・・・どうか」

イッスン「ありがとぅよ、サクヤ姉ちゃん。こいつは有り難く使うぜ。それじゃ行くか！アマ公！」

アマテラス「ワン！（テラ、今行くね！）」

こうしてアマテラスとイッスンはサクヤとオキクルミに見送られながら黒い渦に入って行った。

突入！異次元へ（後書き）

アマテラス「ウゥゥ～（作者の嘘つき！会えないじゃない！（泣いています）」
作者「あ、いや、そのね～～～」
イッスン「ひでぇ奴だぜ」
作者「だって～～。もうネタがないんだよ。誰か助けて！！」

世界の中心で叫ぶ男。

イッスン「情けね・・・・さて次回太陽と月の者『天照と日に神子の再会』だ。

誰か質問でもくれ」

天照と日に神子の再会（前書き）

作者「ついに夏休みになりました。
これからもどんどん書き続けたいです！今回の話は少し辛いかも・・・」
夜リクオ「どういう意味だ？」
テラ「アゥン（分かんない？）」

天照と日に神子の再会

異次元空間

コタネチク「おのれ～～、あの犬畜生め！！」

アマテラスから逃れてきたコタネチクだったけど、他の大妖怪たちにののしれたり、バカにされて機嫌が悪い。

山ン本五郎左衛門「機嫌が悪いのか、コタネ、いや臆病ものよ。（笑」

そう言いながら現れた山ン本五郎左衛門は自分が他の空間から連れていた女の体や胸を触り始めた。

女性「あっ、いやっ」

女はいやらしいうめき声を上げながら快楽を楽しんでいた。
そして山ン本五郎左衛門とキスをした。その後、女の体のすべてが砂となった。

コタネチク「いやらしい奴だな。それより聞きたい、なぜ私はここでは話せる？」

元々自分は大神の世界では鳴き声しか出なかったけど、異次元では話せることに少し疑問があったのだ。

山ン本五郎左衛門「・・・この異次元は常闇ノ皇によって作られた

空間だからだ。それより、貴様どうするつもりか？このまま終わるか？」

コタネチク「ふざけるな！今度は奴の子、日の神子の命を奪ってやる！」

山ン本五郎左衛門「それならワシにいい考えがある。少し耳を貸せ・・・」

山ン本五郎左衛門の考えを聞いた途端にコタネチクは笑いだした。

奴良組本家

雪女「みんな～～ご飯ですよ！！」

本家の妖怪「「「いっえ～～い！！！」」」

妖怪たちは待ちに待った夕食に食らいついた。その騒ぎをテラは外の方から聞いていた。そして暗い空を見つめた。

テラ「・・・（お母さん・・・僕いや私、いつ会えるのかな？）」

いつもなら心の強いテラであるが、ついに寂しい心が現れ始めて泣きだした。すると後ろから声がした。

夜リクオ「どうした？何かあったのか」

食事を済ましたリクオがテラの元に行った。そしてテラが泣いていることに気がつき隣に座った。テラはリクオに質問され、自分が思っていたことを話した。

夜リクオ「そうか・・・親に会いたいか。安心しな、俺が必ず親に会わせてやる！約束だ・・・」

テラ「ワン！（ありがとう）」

テラはリクオに飛び込んで顔を舐めた。突然だったがリクオはうまくキャッチしてテラを抱いた。

？「おいおい、何やってるんだ？リクオ」

突然背後から声がして振り向くとある男がいた。

かつて奴良組二代目総大将をやってた・・・・・奴良鯉伴であった。

夜リクオ「お、親父！？」

リクオは目の前の起きていることが信じられなかった。まだ自分が幼かったあの日に死んだから・・・

鯉伴「リクオ、悪いがそいつを・・・・・殺してくれ」

テラ・夜リクオ「！？」

鯉伴「今ある奴から頼まれてな、その犬を殺してくれとよ。そうす

れば俺は生き返ることができる」

山ン本五郎左衛門「ふふふ、うまくいっとるわ」

空間の中で山ン本五郎左衛門は笑いながら呟いた。彼が考えた作戦はリクオの心の闇を使った作戦だった。相手への情が深ければ深い程、隙や迷いが生まれる。
もし、リクオがテラを殺さなかったら親に対する心に深い傷ができる。テラを殺せば大神の世界は自分たちの物に出来て、隙をみてリクオも暗殺できる。

山ン本五郎左衛門「（ぷぷぷ、どちらにしろワシの利益になる事は間違いないわい）さぁ、早く殺れ！！」

空間の中で山ン本五郎左衛門は子供のように楽しんでいた。
だが突然目の前で光の塊が通り過ぎた。驚いていたが、山ン本五郎左衛門にはその塊が狼に見えた。

鯉伴「頼むリクオ、俺は・・・お前を信じてる」

夜リクオ「（どうすればいい！？俺は、親父を生き返らせるならそうしたいが、だけどテラは・・・」

テラ「ワン、ワン（リクオ・・・僕を殺して！）」

夜リクオ「（何言い出すんだ！？お前は、テラ「（いいんだよこれで。リクオのためなら・・・）」

そう言ってテラはリクオから離れて、鯉伴の前に出た。周りは騒ぎに気付いた妖怪たちが見ていた。リクオは険しい顔をして黙りながら刀を抜き、振り上げようとした。

アマテラス「アッオ～ン（テラ～～～！！）」

リクオとテラは、いや、全ての妖怪が遠吠えがした方を向いた。その先には1匹の大神が走っていた。テラは泣きだした。やっと自分の親・アマテラスに会えたのだ。

鯉伴（？）「おのれ～犬畜生が！！」

鯉伴が大声で叫ぶと姿がフクロウの姿に変わった。そしてアマテラスに襲いかかろうとしたが、この前より力が上がっているアマテラスにとってコタネチクは敵ではなかった。

あっさり筆業・一閃で切り殺された。そして・・・親と子はついに再会したのだった。

リクオ、大神の世界へ行く（前書き）

昼リクオ「最近、ボクの出番が少ない気がするんだけど・・・」
作者「大丈夫！今回も大変なことが起こるからさ。今回は色々なキャラを出すつもりだからね♪」
テラ「ワンワン。（たとえば誰？）」
作者「そうだね・・・・・まあ、それは見てのお楽しみさ。それではよろしく！」

リクオ、大神の世界へ行く

異次元空間ーーー

怨霊王「くっ、どういうつもりだ!?オロチ!!」

悪路王派の妖怪・怨霊王は同じ仲間に妖怪・ヤマタノオロチに攻撃されていた。油断はしていなかったが、オロチの力があまりに強かったのと周りに彼の部下である女郎蜘蛛と赤カブトがいたせいで彼は敗れたのだ。

ヤマタノオロチ「どういうつもりだと?簡単さ。月の民であるお前を俺が殺さないでおくとでも思ったのか?」

怨霊王「何だと!?私を殺せば他の奴らが黙っておかないのだぞ」

自分の言っていることは間違っていない。ここで仲間を殺せばオロチは裏切り者となり、殺されることは確実であるからだ。だが、オロチはそれを笑いながら答えた。

ヤマタノオロチ「そんなことで俺が怖がるとでも?笑わせるな!貴様らの言うことなんか聞くか!!」

そしてオロチは女郎蜘蛛と赤カブトに殺せと命令した。2人は迷いなく怨霊王を殺した。

怨霊王「ぎゃあああぁぁぁぁ・・・・・」

怨霊王の声が聞こえなくなり、周りは静かになった。そしてオロチ達は彼の死体から漏れた妖気をすべて吸収した。

？「くくく、随分と派手に殺したな」

オロチが振り向くのと同時に赤カブトが刀を上げて、声のした方に突進した。

しかし、赤カブトは何かにはね返されてしまった。それでも倒れることはせず、再び突進しようとしたがオロチがそれを止めた。

ヤマタノオロチ「早速殺しにきたのか、キュウビ」

そう言われて現れたのは狐の妖怪・キュウビと武者姿の妖怪・エキビョウだった。

赤カブト「てめぇら、ぶっ殺してやる！！（怒」

女郎蜘蛛「待ちな赤カブト。それを決めるのはオロチ様よ・・・」

攻撃しようとした赤カブトを女郎蜘蛛が止めたことで場の空気が変わり、キュウビの口が開いた。

キュウビ「我々が来たのは簡単だ。お前と同盟を組もうと思ってな」

ヤマタノオロチ「ほう、何故だ？」

キュウビ「我らの目的はただ一つ、あの犬畜生を殺すことだ！！」

キュウビの言葉にオロチ達は驚いた顔をした。
しばらく時間が経ってオロチが笑いだした。

ヤマタノオロチ「なるほど、いいだろう。アマテラス大神を殺すことに異論はない。それなら元の世界でアマテラスを殺そう。ついでにあのガキもな」

そしてオロチとキュウビはともに異次元の渦を発生させてその中に入って行った。

奴良組本家ーーー

アマテラス「ワン。（テラ・・・本当に、本当に良かった）」

テラ「クゥン（お母さん。私も・・・会いたかったよ）」

テラとアマテラスはついに再会した。その再会できたうれしさはリクオ達にも伝わっていた。
リクオはそっと近づきテラに言葉をかけようとしたが、アマテラスの鋭い眼光に恐れた。

アマテラス「ガルゥ〜〜（妖怪なんかにテラを触らせない！！）」

夜リクオ「お、おい。それはないぜ（汗」

緊迫した空気が漂い、本家の妖怪たちも戦闘態勢になる者がいた。
そこをテラが慌てて止めた。
テラ「キャンキャン！（お母さん待って！リクオは私の恩人なの。）」
テラはこれまでのことを全て話した。自分たちが倒した妖怪たちがよみがえったことも。
その後アマテラスはリクオに謝罪してお礼を言った。そしてイッスンが自己紹介（めんどくさいからパス♪↑オイ！！）をした。
イッスン「まぁ、何事もめでたしめでたしだな」
イッスンがそう言った瞬間、黒い渦が現れてオロチ達が出てきた。
ヤマタノオロチ「久しぶりだな。アマテラス・・・」
アマテラス「ヤマ・・・タノ・・・・・オロチ？」
驚きを隠せないアマテラスをオロチは笑い、近くにいた妖怪たちを襲いだした。突然の襲撃に妖怪たちは反撃できなかった。それどころかオロチの張ってある結界で手が出せなかった。
ヤマタノオロチ「さあ、行こうぜ俺たちの世界へ。今度こそ貴様ら親子を殺してやるよ。ついでにそこのガキもな」
夜リクオ「なっ！？」
そしてオロチはリクオ達に噛みつき、そのまま引きずりこんでいった。

「「「「「若～～～～～！！！！！」」」」」

本家の妖怪たちの声が空しく響いた。

【ここからはテラたちの会話も動物ではなく普通になりますので、注意しながら読んでください。】

テラ「う、う～ん・・・あれ？僕は一体・・・・・」

テラがうっすらと目を開けると、辺り一面が草むらであった。そしてそばにあった看板を見ると『神州平原』と書かれてあった。

？「痛～～～」

テラが看板を眺めていると、突然背後より声がした。振り向くとそこにいたのは青色の狼がいた。

テラ「だ、誰だ君！？」

？「おいおい、忘れたのかよ俺だよ。リクオだ」

テラ「う、うそだ！！あなたがリクオ？何言ってるの変な狼のくせに！！」

変な狼・・・？テラの発言に疑問を持ち、大きな木の周りの水面を覗いてみた。

リクオ「な、何ーーーーっ！？」

リクオは水面に写った自分の姿を見て驚愕した。何で！？どうしてこんな姿に？

イッスン「お～い。チビ公、坊主。どこだァ？」

テラ「あ、お母さん、イッスン。実は此処に変な狼がいるの！」

リクオ「だから、俺はリクオだって言ってるだろ！」

アマテラス「（この声と喋り方は）もしかして・・・リクオくん？」

テラを側に寄せて、アマテラスは青色の狼に聞いた。そして再び声を聞いて確信した。テラとの誤解が解けた後、４匹は話し合いをした。

テラ「これからどうするの？お母さん」

アマテラス「この先に神木村という村があるの。一旦そこで休みましょう」

イッスン「そうするしかないか。オイ坊主、しばらくの間お前は犬だからな」

リクオ「お、おう。分かった」

そして3匹は歩き出した。狼の姿になったリクオはテラと一緒に並んで歩いているのをアマテラスはまるでもう1匹子ができた感じだった。

リクオ、大神の世界へ行く（後書き）

テラ「なんか、お兄ちゃんができたみたい♪」
リクオ「そうか？しかし狼って歩くのが早いな」
イッスン「それじゃ、次回太陽と月の者『ツタ巻き遺跡で犬探し！？』見ろよな」

ツタ巻き遺跡で犬探し！？（前書き）

イッスン「今回から大神の世界での話だぜェ！」
狼リクオ「ちょっと待て！なんで：狼：がついているんだよ！？」
作者「だって～～今の君は狼だよ。青色の狼なんてめずらしいよ。
売ったら大金・・・」
テラ「なんか危ない・・・」

ツタ巻き遺跡で犬探し！？

アマテラス一行は神州平原から最も近い村・神木村に向かっていた。

テラ「ねぇリクオ。その刀重たくない？」

リクオがいつも持っていた刀は紐で背中に結んでいていつでも抜けられることができる状態だが、少し長いので重そうに感じた。

狼リクオ「いや、そんなに重たくないぜ。それより、その神木村ってどんな所なんだ？」

アマテラス「神木村は木精サクヤが守っているところで桜がたくさんある所よ」

イッスン「サクヤの姉ちゃんなら坊主の変化について何か知っているかもしれねしなァ」

そして３０分後、アマテラス一行は神木村にたどりついた。

狼リクオ「ついたけどよ・・・そのサクヤという奴はどこにいるんだ？」

テラ「あそこの石段を登った上の大きな木にいるよ」

狼リクオ「よし！それじゃ行くぜテラ」

テラ「うん。リクオ」

2匹は仲良く一緒に走って行った。その様子をアマテラスは優しそうに見ながらその後を追いかけて行った。
しばらくして神木村の入口に多くの緑・赤天邪鬼が姿を現した。

イッスン「お～～～い！サクヤ姉ちゃんいるかァ～？」

イッスンが大声を出して呼ぶと巨大な御神木からサクヤが出てきた。その姿にリクオは見とれてしまった。サクヤの胸もとのボインを・・・・

テラ「リ～ク～オ～～～（怒）」

それに気がついたテラにリクオはどこかへ連れて行かれた。それを呆然と見ていたアマテラスとイッスンも我に戻り、今までの話をしてリクオについて聞いた。

サクヤ「確信できませんが・・・・もしかしたらオロチ達によって何かの呪いをかけられたかもしれません」

イッスン「呪いだとォ？それじゃ解くためにはオロチの野郎を倒しに行かなくては行けねェな」

サクヤ「そう言うことです。アマテラス様、どうか気をつけて・・・」

そう言ってサクヤは消えていった。アマテラスはリクオとテラを呼んで今の事を伝えた。

アマテラス「リクオ君。オロチを倒すまではその体だけど・・・・・いいかな？」

狼リクオ「ああ、どっちにしろオロチの奴には借りがあるからな。必ず俺の世界に帰るぜ！！」

テラ「それじゃ、私はリクオが元の世界に帰れるまで側にいてあげるね♪」

テラの言葉にリクオは嬉しい気持ちになり、ヤマタノオロチがいる『十六夜の祠』を行くことにした。石段を下りると誰かの悲鳴がした。急いで行くと釣竿を持った男の子と桃色の犬が先程入口にいた天邪鬼に襲われていた。

テラ「あれは・・・・・コカリに梅太郎、天邪鬼！？」

狼リクオ「天邪鬼？」

アマテラス「オロチの部下の妖怪よ。どうやらつけられていたみたいね・・・・」

イッスン「何ブツブツ言ってるんだよ！？早くコカリ達を助けるんだ！！」

イッスンの言葉に3匹は気がつき、アマテラスとテラは神器を、リクオは背負ってあった刀をくわえて天邪鬼達を攻撃した。

赤天邪鬼「ギャァァァ！！」

アマテラスとテラの神器と筆しらべで全滅してリクオも緑天邪鬼を

切り捨てた。しかし、１匹の緑天邪鬼が梅太郎を捕まえて逃げ出した。
リクオ達は気がついて天邪鬼を追いかけだした。

緑天邪鬼を追いかけていくと遺跡らしき場所に辿り着いた。そして緑天邪鬼はそのまま遺跡の中へ入ってしまった。

狼リクオ「なんだよ・・・ここ」

テラ「私も初めて来た・・・」

アマテラス「どうやらつれていった犯人がわかったね」

リク・テラ「「え！？」」

アマテラスが冷静に判断してリクオとテラがそれに驚いた。そしてイッスンが重々しく口を開いた。

イッスン「さらった犯人はオロチの部下、女郎蜘蛛！！」

遺跡の中からは強力な妖気が漂っていた。

ツタ巻き遺跡で犬探し！？（後書き）

作者「次の敵は女郎蜘蛛だ。じつは結構蜘蛛好きなんだ」
女郎蜘蛛「あら、それじゃ私と永遠のキスを・・・・・チュ～～～～♪」
作者「やめて～～～～～！！！！！」

リクオ「次回太陽と月の者『女郎蜘蛛の罠』！！」
テラ「お楽しみに！」

女郎蜘蛛の罠（前書き）

作者「今回の敵は女郎蜘蛛！」
女郎蜘蛛「フフン、よろしくね」
テラ「おばさんのくせに・・・・」
女郎蜘蛛「なんだって！！？」
作者「まあまあ」

女郎蜘蛛の罠

天邪鬼に捕まった梅太郎を助けようと追いかけて行ったアマテラス一行は現在、女郎蜘蛛が根城にしているツタ巻き遺跡の中を歩いていた。

アマテラス「まさか再びこの場所に来るとは思わなかった」

イッスン「チクショウ。この場所はキノコがあって嫌なのによォ」

狼リクオ「・・・・・・」

テラ「リクオ、どうしたの？」

アマテラスとイッスンが文句を言っている中、リクオが黙っていることにテラが気がついた。

狼リクオ「あ、いや、なんでのねぇ」

そう言った後、リクオ達は周りが湖で大きな石像がある所にたどりついた。だが前にアマテラスが最初に来た時と同じように湖は紫色になっていた。

狼リクオ「こいつはひでぇな・・・」

イッスン「ここもかつてはとても綺麗な所だったにょォ。早いとこあの蜘蛛女を倒さねェとな」

ドッスン！！！

再び歩き出そうとした時、上の方から何かが落ちてきた。

？「全く。あんまり遅いからこっちから来てやったわよ」

宿敵アマテラスを殺せる喜びを抑えていた女郎蜘蛛だったが、その喜びを抑えられなくなり自分からやって来たのだ。そして自分の腹の中にいる梅太郎を見世物のようにワザと見せ始めた。

そのスキにアマテラスがリクオに女郎蜘蛛の弱点を教えた。

女郎蜘蛛「あんたたちの目的はこいつでしょう？早くしないと溶けちゃうよ」

イッスン「この野郎〜〜。またふざけたことしやがって！！」

狼リクオ「おいてっめえ！」

女郎蜘蛛「うん？ナンダ・・・・・ぎゃあああ」

リクオの方を向こうとした時にはもうリクオの姿はなく、かわりに自分の目玉がつぶされていた。

アマテラス「テラ行くよ」

テラ「はい！」

２匹は同時に筆業・蔦巻　を使って女郎蜘蛛の腹の鉤爪に引っ掛けて動きを封じた。そこをリクオが刀で目玉を潰しまくった。
しかし女郎蜘蛛も負けておらず、蜘蛛の糸でリクオを捕まえようとしたり大きな手でアマテラスを潰そうとした。

女郎蜘蛛「貴様らをオロチ様の所は行かせない。私がオロチ様を守る。私が！！」

狼リクオ「・・・・あんたのオロチに対する忠誠心は分かったよ。けどな、俺は進むぜ」

そう言ってリクオは最後の目玉を潰した。
女郎蜘蛛は悲鳴と共に崩れ落ちて大きな花に変わった。それと同時に湖も元の綺麗な湖になった。

テラ「とてもきれいだね」

狼リクオ「そうだな」

イッスン「さァ～て、梅太郎を連れて行こうぜェ」

アマテラス一行は梅太郎はコカリのもとへ連れて行って、神木村で一夜を過ごしてオロチのいる十六夜の祠を目指して走って行った。

一方ツタ巻き遺跡で・・・

ヤマタノオロチ「死んだか・・・だが安心しろ。お前の妖気はすべ

ていただく」

女郎蜘蛛から漏れた妖気を全て吸収したオロチは消えていった。

女郎蜘蛛の罠（後書き）

テラ「女郎蜘蛛ってとても忠誠心のある奴だったね」
リクオ「そういう奴を仲間にしたかったがな」
アマテラス「次回太陽と月の者『いざ！十六夜の祠から龍宮城へ！？」読んでね」

いざ！十六夜の祠から龍宮城へ

女郎蜘蛛が倒される2日前、鬼ヶ島ーーー

大妖怪キュウビが根城にしている島。
アマテラスに倒されたことで消滅して花に変わったが、復活したことで妖気を集めて再び出現させた。その後は多くの妖怪たちを集めて強大な妖魔王軍を完成させた。そして彼女の心はある2つの思いがあった。
1つは京の都を手に入れること。2つはアマテラスに復讐することだった。
ある日の夜に部下の首無し地蔵がやってきた。

キュウビ「何か用か？」

地蔵「はい。オロチ様が会いたいと言っております」

キュウビ「！！そうか、すぐに行く」
奴(オロチ)の考えていることなど簡単だ。だが、ここは同盟の件もあることでオロチの待っている部屋へ行くことにした。近づくたびに妖気が強く感じた。
奴め更に誰かの妖気を吸収したようだな。

ヤマタノオロチ「よく会うという気持ちになったな、キュウビ」

キュウビ「お前とは手を結んでいることもあるしな。それより今日はこんな雑談をしに来たわけではないだろう？」

ヤマタノオロチ「それじゃ、本題に入るか・・・」

地蔵達が持ってきた酒を飲みながらオロチはキュウビの方を向いた。

ヤマタノオロチ「お前はアマテラスに復讐したいか？」

キュウビ「当たり前のことを言うな！あの犬畜生さえいなかったら今頃は・・・」

アマテラスという言葉に反応してキュウビからは凄まじい妖気が出始めた。それをオロチは笑いながら話し続けた。

ヤマタノオロチ「天邪鬼から報告を聞いてな、もうすぐあいつらはアガタの森の近くを通る。お前はエキビョウと協力してあいつらに西安京（せいあんきょう）と龍宮城を攻めろ。そしてそれぞれ大変なことになっていると知らせるのさ。そうすればアマテラスは必ず来るはずだ」

キュウビ「だがどうやって知らせる？あいつは妖怪だと信じないだろう」

ヤマタノオロチ「言ったはずだが、龍宮城を攻めればオトヒメの奴が勝手に知らせるだろう」

そのことに気付いたキュウビはすぐにエキビョウに知らせて、自分も軍を動かした。

次の日には龍宮城を攻めた。

龍宮城内ーーー

家来「オトヒメ様、味方の兵士は次々やられています！」

オトヒメ「負傷した者はすぐに治療しなさい。何としても此処は守らなくてはいけません」

龍宮の長を務める女性・オトヒメは家来からの報告を聞いても落ち着いて指示をしていたが、内心では焦っていた。死んだはずのキュウビが再び攻めてくるなどあり得ないと思っていたからだ。

オトヒメ「ナナミ、ナナミはいますか？」

ナナミ「はいオトヒメ様。ここに・・・」

オトヒメ「今すぐにこのことをアマテラス様に知らせなさい。我々の命はあの方にかかっているのです」

ナナミはすぐに裏口から出て、妖魔王軍の包囲から抜けていった。キュウビが龍宮城を攻めた報告を聞いたオロチは嬉しい気持ちになった。自分の計画がうまく進んでいるからだ。

ヤマタノオロチ「ククク、全て俺の思いどうりだ。あとはお前に任せる。うまくやれよ・・・」

オロチが向いた先には大きな水槽があり、その中には大きな妖怪がいた。

いざ！十六夜の祠から龍宮城へ（後書き）

キュウビ「今回は我らの出番だったな」

ヤマタノオロチ「なかなかいい作者であるな」

エキビョウ「名前だけ・・・（泣」

作者「あまり時間がないんだからね。さて次回太陽と月の者『新たな百鬼夜行』読んでください」

新たな百鬼夜行（前書き）

作者「やっとテストが終わった～～」

リクオ「それでもかなり時間がかかってないか？（ニヤッ」

テラ「お仕置きだね♪」

作者「そ、そんな～～（泣）こうなったら君たちの存在を消して・・・」

アマテラス「やめなさい！！」

新たな百鬼夜行

アダカの森ーーー

コカリと梅太郎を助けた後、アマテラス一行はぼくせんババの所にいた。
何故ここにいるのか？イッスンがリクオにアダカの森について話したらリクオが興味を持ち、テラも会ってみたいということだった。
しかしぼくせんババの占いの結果は『川より凶報と大いなる力がまいらん！』と言うことだった。
凶報を知るためにアマテラス一行は川の近くで休むことにした。夜になり皆眠りについたが、テラだけ途中で起きて月を眺め出した。

テラ「綺麗な月。私が最初に見たときと同じ月みたい・・・」

テラは自分が前に相棒と旅をした時の事を思い出しながら母から教えてもらった歌を歌いだした。

テラ「散りゆく花びらが街を彩るけど、さいごの時なのと風が教えてくれた♪季節は廻るから心配はいらないと、あのとき横切った月が照らしてくれた♪いつも同じ涙ばかり流し続ける、失くさなわければ気づかないから♪ただひとつ、願いが、かなうのなら、昨日の自分に『さようなら』♪変わらない想いがあるならば、いつか桜の下で～～～♪」

狼リクオ「いい歌じゃあねぇか」

テラ「えっ！？ああ、ごめんね。うるさくて・・・」

狼リクオ「別にいいぜ。むしろ綺麗な月を眺めることができたからな」

リクオと二人きりになれたと分かった瞬間に、顔は赤いが幸せに感じたテラであった。
すると川の方から大きな声がした。それは寝ていたアマテラスとイッスンにも聞こえるほどだった。

？「白ナマコちゃ～ん！！」

テラ「白ナマコって・・・・まさかナナミ！？」

川から姿を現したのは体中傷だらけのナナミであった。テラは驚きながら近づいた。ナナミはテラに龍宮城と都のことを伝えた。エキビョウとキュウビまでが復活したことにイッスンは悔しそうに声を上げた。ぼくせんババの占いがあたってしまったのだ。

イッスン「くっそ！あの女狐の奴！また攻めやがったのかァ！！」

その時、その場にいた全員が後から来る気配に気がついた。大きな水音とともに巨大な影が川から現れた。それはかつてテラとナナミに退治された大妖怪・大ナマズだった。

テラ・ナナミ「「大ナマズ！？」」

大ナマズ「ガアーーー！！」

素早い速さでヒゲを鞭のように振り回して大ナマズはテラを攻撃した。

テラはナナミを乗せてジャンプした。しかし大ナマズは待ってました、という感じで鋭い歯で噛みつこうとした。

狼リクオ「テラに・・・手を出すんじゃねぇ！！」

リクオは全力で噛みつこうとした大ナマズに体当たりした。予想していなかった攻撃をくらって、上空に飛ばされた大ナマズを今度はアマテラスによる連続筆業（おもに一閃）で川に落ちた。

アマテラス「テラ、大丈夫！？」

テラ「う、うん。リクオが守ってくれたから／／」

狼リクオ「／／／いや、まあな（反則だろ今の笑顔／／／／）」

イッスン「コソッ（おいおい！こいつァもしかして・・・）」

ナナミ「コソッ（うん！アレだよ。アレ！！）」

アマテラス「コソッ（ふふふ、テラにも、リクオ君にも春が来たね♪）」

それぞれがいろんなことを思っていると川より大ナマズが現れた。だが、突然苦しみ出して口から何かを吐きだした。『それ』は川の方に逃げようとした。

狼リクオ「逃がさねェよ」

リクオは『それ』の前に出て、刀で突き刺した。その正体は小オロチだった。

アマテラス「オロチが大ナマズを操っていたみたいね」

テラ「こいつ、どうするの？」

狼リクオ「俺に任せな」

リクオは起き上った大ナマズに今までの事を全て話した。それを聞いた大ナマズはしばらく考えて、リクオに頭を下げた。

大ナマズ「助けてくれたんで、あなたに忠誠を尽くすでごわす！！」

狼リクオ「このカッコじゃ無理だが盃を必ず交わそうぜ」

その後、テラたちと仲直りした大ナマズに乗ってアマテラス一行は龍宮城と都に急いだ。

新たな百鬼夜行（後書き）

リクオ「いい仲間が増えただぜ！」

作者「これから大ナマズはどうするの？」

大ナマズ「今回の件が終わったら奴良組のみなさんに挨拶をするでごわす」

イッスン「さて次回太陽と月の者『対決！エキビョウ』見てくれよなァ！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5337t/

太陽と月の者

2011年10月26日00時04分発行